

理学部は今

(題字 増田芳男評議員)



日高山脈の貴重な岩石標本が理学部に寄贈されました。寄贈者の南正氏（左から3人目）を囲んで（8ページの記事参照）。(2000.6.9)

目 次

今、理学部をとりまく状況.....	2	物 理 学 科	谷本盛光.....	5
後援会長のあいさつ.....	3	附属臨海実験所ニュース.....		6
理学部後援会事業報告、事業計画.....	3	セメスター制の導入と推薦入試改革.....		6
学科ニュース		留学生の声		
数 学 科.....	4	生物学科 郭長紅.....		6
物 理 学 科.....	4	物理学科 Badawy Abu-Ibrahim.....		6
化 学 科.....	4	理学部説明会・オープンキャンパス.....		7
生 物 学 科.....	4	卒業生進路状況・平成12年度入学者数.....		7
地 質 学 科.....	5	これからの行事予定.....		7
自然環境科学科.....	5	理学部ニュース		
新任教員紹介		ルイジアナ州立大交流協定.....		8
大学院自然科学研究科 松尾正之.....	5	理学部前庭岩石標本.....		8
生 物 学 科 和田清俊.....	5	編集後記.....		7

今、理学部をとりまく状況

理 学 部 長 長谷川 彰

終戦まもない1949年、新潟大学は、新しい日本の高等教育と学術研究を興すため、他の多くの国立大学と共に創設されました。本学の理学部もこのとき同時に誕生しました。昨年度、私たちは創設50周年を祝い、後援会のご援助によりいろいろな記念行事を実施しました。発足時に比べれば、教員数も学生数も倍増し、新しく自然環境科学科が設置された上に、大学院自然科学研究科も新設されました。このように大きな発展を遂げた今、私たちは二つの大きな試練に直面しています。以下では、理学部をとりまく状況と、それに対する私たちの努力について説明させていただきたいと思います。

第一の試練は、少子化の影響による大学進学志願者の激減です。現在、日本の18歳人口は年を追うごとに減少し、それとともに志願者の数も減っています。このまま行けば、今後10年以内に入学定員の数と同じ位にまで減ってしまうと言われてしています。このように志願者が減りつつある現状では、大学によっては入学定員を確保できなくなり、縮小や廃止に追い込まれる事態が起こります。現在、全国の各大学はこの厳しい時代を生き抜くためにあらゆる方策を模索しています。本学も例外ではありません。

第二の試練は、新聞などでご存知のように、国立大学の独立行政法人化です。平成15年度から、全国の国立大学の設置形態が大きく変わろうとしています。新しい設置形態の下では、各大学は5年程度の期間で「中期計画」を定め、その計画の達成度について国の評価委員会による評価を受けることになります。このような仕組みは、次に述べるような理由から基礎科学にとって大きな問題であると考えられます。

元来、基礎科学の研究者が行っている研究は、直ちに何らかの応用に直接結びつくものではありません。しかし、長い年月を経た後、基礎科学の研究成果が重要な応用につながった例は数え切れない程たくさんあります。実際に、現代最先端の科学技術や医療技術の多くは、かつての基礎科学の研究成果に基礎をおいています。したがって、5年程度の短期間での成果を評価することによって行政の効率化を図るような仕組みは、理学部や関連する大学院における教育と研究を非常に苦しい状況に追い込み、結局は日本の基礎科学の衰退を招くことは明かです。

私たちは、国立大学の独立行政法人化問題が教育改革の一環として生じたのではなく、国の行政改革や経済効率を

求める議論の中から出てきたことに当惑しています。昨年の秋、全国の国立大学理学部長会議では、「危うし！日本の基礎科学—国立大学の独立行政法人化の行方を憂う—」という声明を発表し、この問題への懸念を訴えました。このように厳しい社会的状況の中で、現在、大学は時代と社会からの要請に本当に応えているのかどうか問われています。大学における教育や研究のあり方、教育課程や授業内容・方法、選抜方法、学内組織や運営体制等々、大学のすべての側面について見直しを行うことが求められています。特に、これまでの教育がとく教員個人の努力に任され、大学全体の教育システムとして十分に機能していなかったのではないかと批判されています。また、教育研究及び管理運営を透明度高く行うことが求められています。

新潟大学では、現在、あらゆる活動の見直し作業が急ピッチで進められています。教育面では、昨年夏から大学教育委員会が中心となり、今後本学がめざすべき教育改革の方向について検討を続け、最近、その基本方針を「新潟大学における教育改善」という報告書にまとめました。理学部では、この報告書にまとめられた基本方針を理学部の教育の中にどのように具体化してゆくべきかについて検討を進めています。私たちは先ず理学部全体ならびに各学科や附属臨海実験所における理念と目標を明確にし、それを具体化するための施策をまとめました。私たちは従来の教育内容や教育方法を見直しつつ、新しい試みにも積極的に取り組んでいます。

教育改善の例を二三あげてみたいと思います。昨年度から、社会との連携による教育の一環としてインターンシップ制度（就業体験授業）を導入しました。また、各授業のシラバス（講義概要）を改善し、理学部ホームページ上に載せて学生の利用に便宜を図るとともに、理学部の教育内容を高校生をはじめとして社会に広く公開することを決めました。さらに、来年度から各授業に対して学生による授業評価を実施し、授業内容や授業方法の改善に役立てることになりました。教育を重視した国際交流にも力を入れ、交流協定締結大学を増やす努力を続けています。

後援会の会員の方々には、何卒、今私たちをとりまく厳しい社会的状況と基礎科学の重要性についてご理解をいただき、私たちの努力にご支援を賜りたいと心からお願いする次第です。

後援会長のあいさつ

理学部後援会長 石津 賢二



毎日、厳しい暑さが続いておりますが、皆様方にはお元気でご活躍のことと存じます。

このたびは、大役を仰せつかり、その責任の重大さを痛感しているところではありますが皆様方の御協力のもとに、その任務を果たしてまいりたいと存じております。

新年度も4カ月が過ぎ、大学におきましては、それぞれの計画のもとに、着々とその歩みを進めておられることと思います。

後援会の発足以来、6年目を迎え、多くのご支援をいただき、年々充実してきております。これまでに会員及び役員の皆様はじめ学校関係者の皆様のご熱心に取り組んでこられました事について、厚く御礼申し上げます。

いうまでもなく、後援会の目的は、大学と家庭との連絡を密にして、大学におけるさまざまな活動を援助することによって、大学の理想達成に寄与することにあります。

最近の社会は、めまぐるしく変化しており、新しい時代への対応が強く望まれていますがこのことによって、大学へ寄せる期待がますます高まってきております。したがって、教育及び研究の環境を少しでもよりよい方向に充実していくことは、実り豊かな成果と大学の発展につながるものであると思われるのであります。

これまでに後援会は多くの事業を行ってきておりますが、昨年度ではパーソナルコンピューターなど、その他数々の整備がなされてまいりました。

今年度の事業計画につきましては、さる4月5日の総会で皆様方から御承認をいただきましてありがとうございました。これにより事業の遂行に当りましては、皆様方のご協力を得まして、誠心誠意努めてまいりたいと存じます。よろしくお願い申し上げます。

最後になりましたが、皆様方の御健康と御発展をお祈り申し上げ御挨拶といたします。

後 援 会 報 告

平成11年度理学部後援会事業報告

1. 理事会の開催（理学部大会議室）

平成11年4月3日（土）午後1時30分から

平成12年3月28日（火）午後6時から

2. 定期総会の開催（理学部合同講義室）

平成11年4月9日（金）午前10時から

3. 各種事業

(1) 学生の課外活動及び福利厚生関係

① 新聞の購読(新潟日報、朝日新聞、日刊スポーツの3紙)

② 賠償責任保険の加入

(2) 学部教育事業関係

① 特別講演会の開催（学外講師に依頼し実施）

数学科2回、物理学科2回、自然環境科学学科3回

② 新入生合宿研修経費の補助 数学科

③ パーソナルコンピューターの購入 生物学科

④ 野外実習経費の補助 地質科学科

⑤ 臨海実習経費の補助

(3) 学生の進路指導関係

就職開拓のための会社訪問等経費

(4) 卒業祝賀会関係

3月23日東映ホテルで、卒業祝賀会を開催（卒業式終了後 卒業生208名、教職員26名、保護者18名、後援会役員3名 計255名参加）

平成12年度理学部後援会事業計画

1. 理事会の開催（理学部大会議室）

平成12年3月28日（火）午後6時から

2. 定期総会の開催（理学部合同講義室）

平成12年4月5日（水）午前11時から

3. 各種事業

(1) 学生の課外活動及び福利厚生関係

① 新聞の購読(新潟日報、朝日新聞、日刊スポーツの3紙)

② 賠償責任保険の加入

③ 大学祭参加に伴う援助

(2) 学部教育事業関係

① 特別講演会の開催

② 学生研修等補助

③ 資料収集に伴う援助

④ 国際交流事業関係の援助

○国立ミナソナオ大学イリガン工科大学理学部

○バンドン工科大学鉱物工学部

○中国地質大学北京校

○ルイジアナ州立大学基礎科学部

○中国地質大学武漢校

上記協定締結校との交流の促進

(3) 学生の進路指導関係

就職協定の廃止に伴う就職活動の変化に対応する。

(4) 卒業祝賀会関係

卒業式当日、卒業祝賀会を開催する。(卒業生の保護者の参加も歓迎する)

□数 学 科

数学科新入生合宿研修行われる。

数学科では平成9年度から、新入生を対象にした合宿研修を実施していますが、今年度は、4月8、9日、県立青少年研修センター（西蒲原郡巻町）において、新入生36名、上級生5名、教員4名が参加して行われました。教務関係や厚生関係のガイダンス、角田山登山や懇親会、野外炊事、講義など盛り沢山の内容でした。入学式（4月6日）と授業開始（4月10日）の間の時期に行われたこともあり、大学生としての心構えのオリエンテーションになりました。また学生の顔合わせとして、仲間作りの機会にもなったようです。終了後行ったアンケートでも好評でした。

この事業には今年度も後援会より交通費等多くの補助を頂きました。有り難うございました。

セメスター制に向けてカリキュラム改正行われる。

今年度から全学的にセメスター制に向けての学年暦変更がおこなわれましたが、数学科ではこれにあわせて授業内容の再検討を行い、今年度入学学生から、4年生向けの数学講究を除き、専門科目をすべて半期制（半期で完結する）科目に移行しました。これにより、学生の科目選択の自由度が増す等の利便性が増すことになります。

□物理学科

去る3月に49名の卒業生が新たな門出をしました。その内訳は、本学大学院進学者31、他大学大学院進学者2、企業就職者12、公務員3、教員1となっています。今後の活躍を期待しています。

4月には46名の新入生を迎えました。ガイダンスの折りの質問に答えて、宇宙物理学等を学びたいと抱負を語ってくれました。自らの進む道を見いだしてほしいと願っていますし、そのためにお役に立ちたいと思っていますので、気軽に教職員にアプローチしてください。

新入生の4人に3人が県外出身者という傾向がこの3年続いています。少子化の時代に入学志願者を確保することと併せて、県内出身者の比率をもう少し上げたいと願っています。このための新しい試みとして、物理の先生が高校に出かけて、自然の仕組みや謎を易しくお話する「出張講義」の実施を計画しています。

7月7日七夕の日に、理学部屋上で物理学科の交流会が開催されました。90名近い参加者、とりわけ20名を越える新入生や退官された先生が加わり、半世紀の世代の隔たりを感じさせない夕日をみながらの楽しい会になりました。

□化 学 科

—黒龍江大学化学化工学院との交流協定の締結—

学問・研究の発展にとって、異文化に絶えず触れることが重要であり、この観点から、既に数年以上に亘って、留学生の受け入れや教員の研究留学や特別講師の派遣などの交流実績がある黒龍江大学化学化工学院と本化学科間の交流協定書



の締結(写真参照)が、6月18日(日)に黒龍江大学化学化工学院で行われた。日本語並びに中国語の協定書を確認後、双方の代表者(岡嶋飛院長と橋本哲夫前学科長)が友好交流協定書に署名した。今後の方向としては、従来から行っている留学生の増加に努力するとともに、研究・情報の交流を開始できるよう、化学系の教員で検討を始めることになった。また、複数の自然科学関係学院と理学部との学部間協定書の締結へと発展させる予定である。

セメスター制が導入されたことに伴い、化学第2講義室にエアコンが設置された。8月8日に行われた学部説明会で化学科には高校生34人が見学に訪れた。

□生物学科

人事関係では、退官された武田宏教授の後任に、4月1日付で名古屋大学から和田清俊教授が着任されました。また、古橋勝久教授が名古屋産業大学環境情報学部へ転出され、後任の教授の選考が現在進行中です。

留学生関係では、学部研究生として、中国から郭 長紅さん（ハルビン師範大学生物学部教師）と張 岩さん（ハルビン医科大学修了）の2人が加わりました。

また、高等学校以下の教育内容の変化や学生の多様ななどに対応するためのカリキュラム改革の一環として、進級や4年次における研究室配属に必要な取得単位数が明文化され、平成13年度から実施されることが学生に予告されました。これにより、取得単位が少ないままの、自動的な4年生進級が今後なくなります。また、生物学科の専門科目の教育内容の大幅な見直しも検討されています。

従来要望が多かった推薦入試が生物学科でも13年度入試から導入されることになりました。募集人員は3名です。

また、セメスター制実施に伴う学年暦変更により第1期の授業が8月上旬まで行われることに対応して、生物第1講義室に冷房設備が設置されました。

□地質科学科

平成12年度の新入生を迎え入れ、教室は新たな息吹に満ちています。新入生諸君は近來になく元気だと評判になっていますが、そのエネルギーをますます発展させてほしいものです。この春は、教養部地学教室を創設された長谷川先生が退官され、赤井先生が教授に昇任しました。

6月には3年生の野外実習が韓国を舞台にして行われました。立石・高澤両先生のほかに小林（巖）、周藤、教育人間科学学部の黒川先生も同行し、にぎやかな巡検となりました。韓国に到着した日には忠南大学の李先生や学生たちが歓迎パーティーを開催してくれ大いに盛り上がりしました。巡検には、李先生はじめ韓国資源研究所の孫さん、釜山大学の尹先生、そして済州島では自然史博物館の姜さんたちに案内していただき、韓国の地質について見聞を広げるとともに日韓友好を大いに深めました。

4年生は、課題研究が始まり、いよいよ来年の卒業論文発表へ向けて取り組み始めています。就職状況はなかなか厳しいようで、内定通知が出た人はまだごく少数のようです。また、教職研修や博物館研修、9月の大学院入試もあり、4年生は大忙しです。

教室ではこのほか、この5年間の歩みをまとめた教室年報をまとめたり、独立行政法人などに関連した様々な問題に取り組んでいます。

□自然環境科学科

本学科では、昨年度、「インターンシップ」科目を開設しました。内容についてあらかじめ打ち合わせを行った事業所での2週間程度の就業体験を大学の単位として認定するものです。学生の社会への軟着陸を計ることが目的ですが、それと同時に、学生が基礎的学問の社会での位置づけについての認識を深めることによって、学習への動機付けとなることを期待しています。

昨年度は、新潟県立保健環境研究所、新潟県立自然科学館、新潟県立植物園、新潟市立水族館、新潟県環境衛生研究所、上越環境科学センターの7事業所の協力を得、12名の学生が参加して実施されました。2月には、受入事業所の担当者、新潟経済同友会専務理事の出席を得て、「学ぶことと働くことの狭間で考えること」と題した集会を開催しました。参加学生、担当者から率直な評価と意見、また、経済団体からの大学の評価と要望を知ることが出来、有益な集会となりました。

本年度は(株)キタックが受け入れ事業所に加わり、19名の学生が参加します。私どもは学生にとって有意義な体験となることを期待することはもちろん、これらの活動を通じ、どちらかという少し距離があった理学部と実社会との間の相互認識が深まることを期待しています。

新任教員紹介



松尾 正之 (大学院自然科学研究科)

本年3月1日に助教授として赴任しました。大学院の頃からずっと、原子核の構造と励起についての理論物理学的研究を行っています。原子核は数個から数百個の核子から構成された量子性の著しい多体系で、驚くほど多様な性質を現します。その中でも、ラグビーボール型やテトラポッド型に変形したり、量子カオス的な核子の運動と規則的な回転運動が共存したりするメカニズムの研究などを最近は行っていました。赴任前は研究所にしばらく勤務していましたので、大学院生や学部学生でにぎやかな環境が久しぶりで、大学という場所の重要性和楽しさを再発見しつつあります。これを契機に、学問研究もリフレッシュして行こうと思っています。よろしく願いいたします。



和田 清俊 (生物学科)

平成12年4月に教授として赴任しました。生体制御学大講座で植物発生生理学の教育と研究にあたります。東京大学で理学博士の学位を取り、東北大学農学部助手、名古屋大学農学部助教授を歴任してきました。植物は光や温度などの環境要因を巧みに利用して自分の生き方をコントロールしています。その仕組みを解き明かすのが私の研究テーマです。新大では、アサガオが花を咲かせる仕組み、その花の形を形作る仕組みの解明に取り組みます。新潟の冬は雪が多いし、風が強くて大変だ、と散々脅かされてきましたが、キャンパス内でも見られる日本海側・砂丘地に特徴的な植物や動物を楽しんでいます。「大学の森」は全国的にも自慢できる財産だと思います。



谷本 盛光 (物理学科)

本年4月1日に物理学科の教授として赴任してまいりました。前任地は愛媛大学で、北国での生活ははじめてです。そのため、ものめずらしいことが多く日々知見を広げています。大学が異なればその運営も異なることがよくわかり、けっして、国立大学は画一的に運営されているのではないことを実感しています。現在、ニュートリノの理論的研究を進めています。このテーマは実験、理論ともに日本が世界をリードしている分野のひとつです。神岡における大気ニュートリノ実験の結果は世界に衝撃をあたえましたが、この理論的基礎である「ニュートリノ振動」や「ニュートリノ質量」に関する研究は日本から誕生したものでした。これまでの日本における研究成果の上に、新潟の地で新しいものを積み上げることができればと考えております。

附属臨海実験所ニュース

「新実習調査船 IBIS2000」

臨海実験所の旧実習調査船 IbisIII 号は建造後27年を経て老朽化が著しかったため、船舶の更新が待ち望まれていましたが、今年3月に念願の新実習調査船 IBIS2000が納入されました。新しい実習調査船はヤンマー社製造のFRP製で、全長11.32m・幅2.67m・重量3.8t・定員13名のキャパシティを持ち、最大30ノットで走行することができます。さらにGPSやソナー、魚群探知機などの航海機器や、ウインチや集魚灯、ドレッジ、各種プランクトンネット、採水器など資料採集用の設備・機器類も装備されています。今回の実習調査船の更新により、臨海実験所における教育・研究の一層の充実が期待されます。



セメスター制の導入と推薦入学試験改革

新潟大学では今年度から授業暦にセメスター制を採用しました。セメスター制とは1年を1学期と2学期に分け、1学期の授業は1学期で、2学期の授業は2学期で完結させるシステムです。これにより、学生の授業選択の幅が大きくなりました。セメスター制では1学期は4月に始まって8月に終了し、その後は9月まで夏期休業となります。2学期は10月から翌年の3月までです。従来とは異なり、1学期は夏期休業前に終了するので、集中的に授業が行われ教育効果が向上するものと期待されます。しかし、暑い夏の間に授業を行うためにはエアコン付きの講義室が必要です。今年は2つの講義室にエアコンを設置し、少しでも快適に授業が受けられるようにしました。

理学部では、いろいろなタイプの学生に入学してもらうため、来年度の推薦入学試験の方法が大幅に変わりました。変更点は、これまで推薦入試を行わなかった生物学科が加わり、理学部の6学科全てが推薦入試を行うことになったことと、従来課していた大学入試センター試験を免除することです。これに伴って推薦入試の期日も11月と早くなりました。選抜は面接、小論文および調査書を総合的に判断して行います。

(洞口高昭 教務委員長)

留学生の声

新潟大学の印象

郭 長紅 (生物学科)



本年度4月17日県費留学生として中国のハルビンから新潟大学へ来ました。海外での研修は第一回目で日本に来る前には少し心配しましたが、新潟に来てからその心配が不要だったとすぐ分かりました。新潟の人たちはとても友好的で、指導教官の岩崎先生をはじめ、研究室のみなさんもやさしくて、いつも親切、丁寧に教えて下さいます。すでに生活や実験室の仕事に慣れて、毎日楽しく、充実した生活を送っています。これまで主に育種上有用な遺伝子を小麦に導入する研究に携わっていましたが、いま行っているイネの光応答に関わる分子生物学的研究は研究のテーマ、手段、材料も全部新しいもので大挑戦と言っても過言ではありません。研究視野を広めるためにこの研究は私にとってプラスになると思っています。今、岩崎先生の御指導の下で一生懸命に頑張っています。あと8か月新潟大学でお世話になるとしますので、よろしくお願い致します。

Two years in Niigata



Badawy Abu-Ibrahim (Research Associate, Fac. of Sci., Cairo University)

Happily, I got two years' scholarship from Egyptian Government to complete my Ph.D program in either U.S.A, Europe or Japan. I chose Japan and contacted Prof. Y. Suzuki, Niigata University, whom I have known from his published works and scientific fame. To my luck, he accepted me as a Ph.D student. When I arrived in Niigata in April 1998, I did not find a big difference between Egyptian and Japanese societies. Niigata is a beautiful city: The high density of trees and beautiful flowers surprised me. The problem that I had was due to the weather especially in winter, but I enjoyed myself by the snow which I saw for the first time in my life. Also I found some problems in communication with Japanese people because I could not speak Japanese and Japanese people do not speak English in general, so unfortunately I got few friends. Japanese people are hard workers, kind and polite. I have accomplished a hopefully good thesis work and recall Japan with good impressions. I hope I can see it again.

理学部説明会報告

セメスター制実施で昨年度より1週間遅く、8月8日(火)の12時30分から実施された全体会では、教養棟 B255教室を会場にして、理学部の概要が1時間ほど説明されました。学部長のあいさつ、各学科長の紹介に続き、平成13年度入試について洞口教務委員長から、また学生生活と卒業生の進路状況について小林学生委員長から説明がありました。参加者実数は、県内の高校生150人と教諭13人、県外からの高校生42人と教諭2人の合計207人で、これは昨年度より40人ほど増えています。この他に父母の参加者も見受けられ、学部説明会が重要な行事として、定着してきたことが実感されました。



全体会のあと6学科に分かれて、13時30分から2時間ほど、各学科独自の企画による概要説明、学生生活の話、野

外実習の説明、研究室実験室の見学などが行われました。並行して、進路指導担当教諭との懇談会が開かれ、推薦入試を主な話題として、入試制度全体について要望、質疑応答、意見交換がありました。



8月8日に行われたオープンキャンパスでの講義風景
「高校で学ぶ数学を使って、コンピュータにきれいな絵を描かせてみよう」講師は明石重男助教授

平成11年度卒業生の進路状況および平成12年度入学者数

学 科 等	卒 業 生 進 路 (平成12年3月卒業)						入 学 者 数	
	進 学	教 員	公務員	民間企業	その他	計	新入学	3年次編入学
数 学 科	10	4	2	13	8	37	39	2
物 理 学 科	33	1	3	13	5	55	46	3
化 学 科	21	1	1	12	3	38	40	2
生 物 学 科	13	1	3	3	8	28	22	7
地 質 学 科	12	0	1	4	4	21	27	0
自然環境科学科	15	0	2	9	4	30	32	5
理 学 部	104	7	12	54	32	209	206	19

これからの行事予定 (平成12年度後半)

10月2日(月)	2学期授業開始
11月25～26日	推薦入試
12月25日～1月7日	冬期休業
1月20～21日	大学入試センター試験
2月25～26日	前期日程入学試験
3月11日(日)	～春季休業
3月16日(金)	後期日程入学試験
3月23日(金)	卒業式・卒業祝賀会

編集後記

4月から私以外の委員が交代し、新しい感覚で、編集作業を行いました。多くの事業が行われ、お盆前の暑い盛りに原稿執筆あるいは編集作業を担当された諸氏には大変お疲れ様でした。無事4号を発行出来そうです。本誌は今までは各種紹介記事が多かったのですが、今後は、後援会員の皆さんからの理学部への要望やご意見を掲載し、意見交換の場にしたと考えておりますので、当委員会まで、是非原稿をお送りください。なお、本4号から、理学部ホームページに掲載しますので、併せてご覧下さい。(郁)

広報委員：竹内(数学)、金子(物理学)、徳江(化学)、岩崎(生物学)、志村(地質科学)、石田(自然環境科学)

新潟大学理学部・大学院自然科学研究科 —ルイジアナ州立大学基礎科学部交流協定 締結記念シンポジウムの開催

標題シンポジウムが5月29日から6月2日まで本学で開催されました。ルイジアナ州立大学からは Strain 副学長補佐、Silverman 基礎科学部長を含めて総勢10名の参加がありました。シンポジウムでは教育・研究の内容、現在直面している課題、将来計画などが相互に紹介され、活発な討議が行われました。合わせて、ルイジアナ州立大学からの参加者の方々には学長へ表敬訪問していただくとともに、附属図書館、附属図書館旭町分室、遺伝子実験施設、脳研究所（中田 COE プロジェクト）、理学部附属臨海実験所などを訪問していただきました。また、歓迎パーティにおける鏡割の体験や新潟市民芸術文化会館での狂言鑑賞を通して日本の伝統文化に触れていただく機会も設けました。机上の交流協定を実効のあるものにするためには始めが肝要です。協定の締結後、間髪を入れずに相手側の要人を招いてこのような直接的な交流の場をもったことにより、相互の理解が著しく進展しました。今後、両部局間の交流が大きく前進することは間違いなく、さらにその交流の輪が全学的に広がっていくものと期待されます。

（シンポジウム開催組織委員会）



学長表敬訪問



シンポジウム参加者の記念集合写真

理学部前庭岩石標本「地球深部の散歩道」



日高変成帯を代表する重要な岩石の数々

さる6月9日、北海道様似郡様似町の株式会社南組（代表取締役会長：南正氏）から、北海道日高山脈の代表的な岩石が合計約30個（約15トン）、新潟大学理学部に寄贈されました。南氏が所有する浦河生コンクリート（株）は、日高山脈に産する様々な岩石を、石材として加工・販売してきました。近年南氏は、多くの地質研究者が毎年日高山脈を訪れていることや、2002年に様似町で国際学会が開かれることを知り、教育・研究に何か役立ちたいと思うに至りました。

一方、理学部地質科学科では、これまで多くの教員・院生・学生が20年以上にわたり日高山脈の研究を続けてきました。そして日高山脈には海洋地殻の岩石とともに、島弧地殻～上部マントルに至る断面が露出していることを明らかにし、学会からセンセーショナルに受け入れられた経緯があります。今回の寄贈は理学部と様似町の長年の交流の結果実現したものであり、たいへん喜ばしいことです。6月9日当日は南氏も来学され、長谷川理学部長より感謝状が贈呈されました。

今回寄贈された岩石は、上部マントルの岩石である「かんらん岩」、下部地殻を構成する高温の変成岩である「グラニュライト」や、変成岩と花崗岩の混じった岩石である「ミグマタイト」などです。これらの岩石には、マグマの成因や地球の地殻の形成過程などの重要な情報が残されており、教育研究上極めて重要な標本ばかりです。また、今後の総合博物館の設置構想にも役立ってゆくものと思われます。

これらの標本についてのホームページ、
<http://ataka.sc.niigata-u.ac.jp/geology/concourse/index.html>

も開設しました。実物とともにぜひご覧下さい。

（地質科学科 高澤栄一・志村俊昭）